

## 柴田町住民自治によるまちづくり基本条例審議会（令和4年度第2回）要旨

日時：令和4年9月29日（木）  
午後2時22分～午後4時41分  
場所：特別会議室

### 〈出席者〉

中嶋紀世生委員、志子田清蔵委員、佐藤修委員、阿部有子委員、佐藤正壽委員、関六郎委員、大庭三余子委員（9名中7名出席）

### 〈事務局〉

沖館まちづくり政策課長、菅野課長補佐、佐山主任主査

### 〈傍聴人〉

なし

### 1. 開会

### 2. 会長あいさつ

### 3. 会議録署名員の指名

佐藤正壽委員、関六郎委員（輪番制）

### 4. 議事

中嶋会長：今日は事前に事務局から報告書の案、修正版の方を皆様に送っていただきまして、見ていただいているかなと思いますけれども、主に一番最後の今後の課題のところを皆さんとお話したいなと思っております。

ただ、前回6ページまで皆さんにご意見いただきまして修正が入っておりますので、この辺を確認して、その後に、3番の話に行きたいと思います。

ではまず3ページまでですね、ご意見いただいて直している部分がありますので、事務局から、ご説明いただいてもよろしいでしょうか。

佐山主任主査：（資料を基に変更点を説明）

中嶋会長：前回も3ページまでは特にご意見はなかったかと思うんですけども、今のご説明で何か追加とか、確認したい部分がある方いらっしゃればお願いします。

なければ、次に進みたいと思います。

関委員：2ページなんですけども、参加と協働のまちづくりと2か所書いてありますが、参加と協働だけ言ってるんじゃないかとまちづくりにならない。情報があって、その中での参加と協働のまちづくりじゃないかと私は思うんですよ。基本条例の三本矢っていうのは情報の共有と、協働と参加なんだよね。これが入った方がいいかと私は思うんですけども、皆さんどう思われますか。

志子田副会長：私は基本条例に基づくという言葉が最初に入ってるから、それでも十分じゃないかなと思います。情報共有というのは、手段としては必要かも知れないけれど、今回のことでは、基本条例に基づくという言葉が強調されているから。あとはその中の詳細として

情報共有とかそういうのが出てくるということでもいいんじゃないかなと思っています。

中嶋会長：今、関委員から情報の共有というところを入れた方がいいんじゃないかというご意見をいただいて、それに対して、特にここでは触れなくてもいいんじゃないかというご意見があったんですけども、それについて、事務局で、この辺の文言の整理はどのようにさせていただきますでしょうか。

佐山主任主査：例えば、住民自治によるまちづくり基本条例の前文ですと、前文の最後のところに、住民が主体となった参加と協働によるまちづくりの実現を目指し未来に向かってと書いてあって、「参加と協働によるまちづくり」というのは、一つのキーワードみたいなものになっているのかなという認識があって、情報共有がそれと並列しているという認識はありませんでした。

情報共有が必要だっていうのは、後段でも書いてあるかと思うんですけども、参加と協働と情報共有という認識ではちょっとなかったところです。

中嶋会長：事務局の意図としては、参加と協働はそれぞれの言葉ではなくて「参加と協働のまちづくり」ということで一つの言葉として扱っていて、その手段が情報共有であったり、場づくりであったり、そういうところだというようなご説明だったんですけども、これに関してはいかがでしょうか。

関委員：ちょっと皆さんの意見聞いてみてください。

佐藤（正）委員：私は今の説明でいいと思いますよ。

阿部委員：条例をつくる時点でのキャッチフレーズみたいなものが、参加と協働のまちづくりだったと思うんです。だからそれは、一つの言葉で、まちづくりに参加と協働があるよということじゃなくって、この住民自治基本条例のキャッチフレーズみたいなものだと思っていました。そこに情報を入れたらきりが無い、いろいろ入れなきゃいけないなくなっちゃう。

その条文を見ても、第一節のテーマが参加と協働によるまちづくりなんです。なので、このままでいいと思います。

大庭委員：私も、参加と協働のまちづくりって一つのセンテンスになっていて、情報って後ろの方で、次の4ページ目で情報という部分がより明確に表記されてるので、それでよろしいかと思います。

志子田副会長：要するにこの2ページは挨拶文なんだよね。

挨拶文だから、次のページから、検証した結果とかそういうのは載ってるんだから。

佐藤（正）委員：関委員の意見もわかりますけども、これは多数決で決める話ではないのかもしれませんが、副会長が言ったように、情報ってのはあくまでも手段だと。その他に意見があったり提案があったり、いろんなことがずらずらとありまして、ここはイントロとして、参加と協働のまちづくりを検証しますって入っているので、そのあとで手段なり内容なりっていうのをやっていってはどうかと思います。

中嶋会長：よろしいでしょうか。また最後に全体の内容に対して、コメントいただいてもよろしいので進めたいと思います。

次にアラビア数字の2番、審議会からの提言というところですね。これは前回かなり時間をかけて、皆さんに見ていただきました。4から6ページの部分になります。

こちらは前回のご意見も取り入れて、大分直しておりますので、こちらについても事務局の方からの修正点等、ご説明いただければと思います。

佐山主任主査：（資料を基に変更点を説明）

中嶋会長：ページごとに見ていきたいなと思います。

前回「てにをは」とか細かい部分までご指摘いただいて、かなり時間がかかってしまったんですけども、私も文章でいろいろ気になるところはあるんですが、今回は、この内容について、今までの議論で入れるべき事項がしっかり入っているかということと、あとは言葉の選択がこれで適切かということや、文章表現などその辺の部分について、さらに追加でご指摘等あればお伺いしたいと思います。

4ページの部分、今説明いただきましたけれども、ここはちょっと直して欲しいとか、こういう部分付け加えていただきたいっていうものがある方がいれば、ご意見お願いいたします。大丈夫そうでしょうか。

箇条書きにしたことですごく見やすくなって、こちらの審議会で議論した内容が伝わりやすくなったかなと私は思っております。前回からいろいろ追加で、入れた方がいいんじゃないかという部分もしっかり入っているかなと思っておりますので、もしよろしければ、次にいきたいと思っておりますけれども、また気づいた点があれば後で戻ってください。

5ページの部分についても、こちらは4ページと比べるとここまで修正点はないんですけども、何かお気づきの点等ある方いらっしゃれば、お願いいたします。大丈夫そうでしょうかね。

6ページ最後(2)番のコーディネーターの必要性ですとか、まちづくり推進センターとかその辺の部分についても、この内容で、しっかり伝わる文章になっているかどうかをご確認いただければと思いますが、いかがでしょうか。

大庭委員：真ん中あたりの生活支援コーディネーターって私の職種なんですけれども、学校支援コーディネーターというのが生涯学習課の中に置かれているんですが、教育制度が変わって呼び名が変わったと、今日、来る前に確認をしました。ちょっと長いんですけど「地域学校協働活動推進員」というとのことでした。

コーディネーター的には、統括コーディネーターと地域コーディネーターという、委嘱があるのでその辺はちょっと事務局と詰めてそこの二つの職種まで入れるか、生涯学習課と調整いただければなというふうに思っております。

中嶋会長：事務局で確認いただいて調整いただければと思います。

志子田副会長：生活支援とか学校コーディネーターというのだけの記載になっているけど、この中には、生活相談員とかそういうのも含めているんだよね。

佐山主任主査：そうですね。などというところにいろいろな中間支援的にコーディネートを行う方はいらっしゃいますよねということは、含んでいるという認識でいます。

中嶋会長：他に何かお気づきの点、ある方いらっしゃいますでしょうか。

ご意見なければ、2番についてはこの内容で。もう一度細かい部分は文章チェックしたいと思っておりますけれども、概ねこういう項目でまとめていきたいと思っております。

最後3番、今後の課題についてですね、こちらは今日初めて文章を皆さんで議論しますが、まず事務局から説明いただいてもよろしいでしょうか。

佐山主任主査：（資料を基に内容を説明）

中嶋会長：前回5つ項目を挙げていただいた中で、2番との関係を整理して、3番を2点に整理していただきました。

1番については、参加と協働のまちづくりを進める中での、前半が人の強化とか人づくりとか、コーディネーターを置いて、地域の活動を盛んにしていきましょうというのは人の面ですね。後半は議論もいろいろ出ました、場づくりとかの話になるのかなというふうに思いました。

まず、事務局で特に確認していただきたいところが、後半の部分で、拠点の整備という言葉を使ってしまうと、ハコモノ整備といったイメージを与えてしまうということで、特に前半で都市構造再編集中事業という、ちょっとハード的な事業の名前が出てるので余計その辺に引っ張られてしまうかなと思うんですけども、この言葉の使い方ですかね。審議会で議論した意図にうまく合っているかというところを皆さんのご意見を伺いたいと思います。これは一人一人聞いた方がいいかなと思います。

ぜひこう直したらいかがかなというアイデア等あればお願いいたします。

大庭委員：この今後計画される都市構造再編集中事業とは、国土交通省でよく言ってる小さな拠点事業って理解していいですか。小さな拠点事業っていうのは、国交省であったりしたんですが、それとはまた違うんですか。

沖館課長：立地適正化計画に基づいて、行政と民間で行う都市構造の機能ですね。居住環境の向上に資する公共施設の整備、あと防災機能の強化とか、そういった取り組みに支援が受けられるっていう制度があるんですね。

大庭委員：居場所っていうのは、福祉課とか健康推進課とか、社協でも取り上げてる拠点とかのところで取り上げたんで、小さな拠点事業かなと私の中で思ったところがあったんですが、例えば小さな拠点だったら、コーディネーターが必ずいるという形になっているのでその辺の事業の理解ですけど、やっぱりハードをこちらから提案するっていうよりも、行政と住民とのパートナーシップのもとで作っていく制度なので、やっぱりソフトでいいんじゃないかなと思っています。やっぱり拠点をハードとして作るのが私たちの提案ではないと思っていますので、その辺の表現を皆さんと議論出来たらと思っています。

佐藤（修）委員：これを読んだときに、正直やっぱり何かがここにできるのかなって思いました。箱物とイメージができてしまって、仙台大学からそこに誰かを派遣してとか考えてしまった。確かに今、大庭委員がおっしゃったように、ソフトの面での、いかに引き出しをたくさん埋めていくかって感じがするものですから、箱物をつくってくれというのは、そぐわないのかと。この文章はやっぱりちょっと箱物という印象が強いかなというふうに思っていました。

阿部委員：ここの表題が、中間支援機能の拡充ということであるならば、上は地域支援コーディネーターですよ。下は中間支援ということではなく、やっぱり箱物イメージする文章になっているので、仙台大学と地域コミュニティの連携ですよ。

仙台大学と地域コミュニティが、連携しやすい、連携したいと思ったときに、それを手伝

ってくれる、そういう組織の整備が必要ですよという文章だったらいいなと思うんです。

この文章だとどうしても拠点という言葉もあるので。

仙台大学の人にいろいろ手伝ってもらいたいという地区いっぱいありましたよね。その時に、どこにお話したらいいのか、誰が手伝ってくれるのかということがもっとわかりやすくなるようにといった文章だったらいいなと思います。

中嶋会長：もう少し補足も必要かというようなご意見でした。

佐藤（正）委員：ここだけに限ればですね、私としてはまちづくり推進機能を持つ組織等の整備というふうな表現でいいと思います。

関委員：仙台大学の佐藤委員に聞きたいんですけども、前任の佐々木委員が、都の跡地のことを言っていたんですが、どこまで具体的に進んでいるのか、あるいは町のスタンスはどうなってるのか課長にちょっと聞きたい。

阿部委員：あそこは今アパート建てていますよ。

関委員：その中に第2ゆる. ぷらを作れないかなと話したんですよ。前任の佐々木委員から伺っているのかどうか。

佐藤（修）委員：それは聞いていません。

佐藤（正）委員：あれは、大学を代表とした発言じゃないですよ。例えばそういうのをどういうふうな文面にしようかっていうことで、私は組織等という表現を提案したんですけども。今の議論に絞って発言してください。

志子田副会長：都市構造集中再編事業っていうのは、5月かその辺に、都市建設課で説明会あったんですよ。皆さん参加してお話を聞けば、これの内容ある程度わかんと思いますけれど。一応私は、都合がついたから行ったんですけど、聞いたときには、中山間地はほっぽらかしになるのかというような感覚を受けるようなイメージの都市計画でしたね。

それでどちらかという、やっぱり今、町で抱えている問題というの、その中には網羅されるけど町長が前から言っているコンパクトシティ構想と意外と合致しているんだよね。

あとは、確かに拠点っていうと、箱物っていう感覚になります。私も佐藤さんと同じように推進機能を持つ組織っていう方がいいかなと思います。

それで、イメージとしてはですね、白石市が株式会社白石と、あとはまちづくりって二つ組織があるんだよね。まちづくりの方は、4号線沿いで、もう一つの株式会社の方は、寿丸屋敷を拠点にしてるわけだよね。お互い連携して、いろんなことをやってるよね。

だから、うちもゆる. ぷらにあそこがいいんだよ。それで、せっかくしばたの未来会社作ったんだから、そこをうまく活用できないかなと思っているんですよ。そうすると新たな箱物を作らなくても、そういう連携はできるんじゃないかなって思っています。

だから、ここには推進機能を持つ拠点とあるけど、先ほど佐藤委員が言ったように、機能を持つ組織を整備すれば良いっていう格好にしておいたほうが無難かなと思います。

佐藤（正）委員：ちょっと中身をよく理解してないですけどせっかく都市構造再編集中事業という単語を入れているので、もう少し、ここの中に、今提案があったような内容とか、議論した内容もちょっと付け加えて、もう少し膨らませるっていうか、もうちょっと言えないで

しょうかね。私も知りませんが、ほとんどの人が、都市構造再編集中事業なんて知らないと思うんですよ。だから、そこに、ここで議論したような機能も合わせるような内容をもっと入れられればありがたいなというふうに思います。

志子田副会長：細くなり過ぎると論点がぼやけてくるから。一極集中の論点に持っていく方向でいった方がいい。

阿部委員：このままいくと、仙台大学との連携も、上の地域支援コーディネーターの役割になってしまうのかなって思うんですね。だから、あえて仙台大学との連携促進ということ、個々に書き出して、仙台大学ももっと地域コミュニティが連携したがつているんだよという文章が入らないと、地域支援コーディネーターの役割に入るでしょっていうことにならないかなと思ったんですけど。

佐藤（正）委員：だったら、仙台大学との連携を推進するためにも大学に近い船岡地区中心部にまちづくりの推進の拠点を検討するとか。置くと約束はできないんですけども、まちづくりの拠点の検討をお願いしたいとか何かもう少し強くしたらどうですかね。

阿部委員：拠点はいらなかなって思うんですけど。仙台大学との連携をもっと進めたいという文章を膨らましたいなど。

中嶋会長：今の仙台大学との連携はかなりずっと初期のころから大事だねってお話されてきて、何とか連携したいっていう、皆さんのご意見ご要望がありました。

大学として、おそらく地域と連携方針のような、何か希望みたいなものがあると思うんですけども、大学側の地域連携の考え方みたいなものはどういうふうになっているのか、わかる範囲で、佐藤先生から教えていただけませんか。それも組み入れて作った方がいいかなと。

あまり大学へはこれやってあれやってとは言えないんですけど、何か方向性とかがあれば。

佐藤（修）委員：今後の予定で一つだけあるのが、今、防災教育を大学として力を入れてるんですね。10月の下旬に、防災セミナーを開き、そこで、柴田町とか名取市の方々をお招きして、今後の防災の、特に情報の取り方をどうしたらいいのかとか、そういうことをレクチャーしようじゃないかっていう話がありました。

あとは、何か災害があった時の避難所として活用できないのかとか、そういう防災面での拠点にならないかという話は出ています。

普段の学生と地域の方の繋がりというのは、具体的には出ていません。ただ、例えばコロナの時の学生の行動は地元の方に不安を与えないような行動をなささいとか、地元で愛される学生でいなさいよっていうようなことは常々言われていますね。

ちょっと答えになってないと思いますが。

中嶋会長：船岡地区中心部にまちづくり推進の拠点をと書かれると、多分大学としても何かやらないといけなくなる可能性もあるので、その文言が入っていても大学として問題ないかはちょっと心配なので。

佐藤（修）委員：そうですね。いきなり仙台大学が出てきたものですから。

阿部委員：各地区で、レクリエーション部の方々に来ていただいて地域のいろいろなイベントを盛り上げていただくとか、それから私はさくらマラソンをやっていたのですが、仙台大学がないと、到底開催できないぐらいのポジションでやっていただきましたし、そういう意味で仙台大学の力というのは町民にとってとても大きいし、頼っているし、その連携をもっとスムーズに図れたらいいなっているのはあると思うんです。

やはり、いろんな地区で何かをするときに、大学生もまざってくれたら嬉しいなっていることがいっぱいあると思うので、そういう意味でもっといろいろ連携できたらいいねという声がたくさん出たんですね。

佐藤（修）委員：仙台大学の人的知的資源を活用したまちづくりとか、そういうようなコメントだと。人的、知的はちょっと自信ないんですけど、人的知的資源を活用したというような文言があるといいかなと思ったんですよね。

佐藤（正）委員：文部科学省としてはですね、数年前から各大学が地域とともに、各大学の特性を発揮して、地域貢献しろっていう方針を明確に出してるんですね。

昔は、例えば工学部はね、高度な専門知識やって、地域関係なく研究すればいいんだっていう時代もありました。しかし、最近は株式会社にするような動きもあるぐらいにですね、大学、学部によりますから一概には言えませんが、各地域とともにですね、各地域に支援するよう明確に文部科学省が出してるんですね。

そういう意味でも、今提案あったように、我々も町も大学も一緒になってね、何かこのメリットを生かして、新しいものを作っていこうというような文面になると、いいんじゃないかなという気がしますね。

佐藤（修）委員：それと直接絡むかわかりませんが、例えば中学校の部活動支援とかで、今、地域の人が船岡中とかに、各部活の指導に行ったりもしてありますが、そういう地域との連携も大学としても持ちたいという気持ちが強くありますね。

阿部委員：それをもっとスムーズにできたらいいねと。そういう意味ですよ。

佐藤（正）委員：学生も地域とともに動くことによって、自分自身の人間形成とか、いわゆる育成にプラスに働くであろうと文部科学省では期待してるんですね。一緒にやれという単語だけじゃなくて。そういう意味で、仙台大学の特徴を生かして、仙台大学としてどういうふうに地域貢献ができるか、その中で、学生をどういうふうに育て上げて、地域に貢献するかということを期待するわけですよ。

一つ問題があるのは、仕事がないですね。大学に行くのはいいですけど、戻ってきて働く場所が柴田町にないという問題があって、なかなか人口も定着しない。

今の若者に対して、今後10年ですね、今まで考えられなかった仕事に人がつくということがあるんですね。つまり、YouTubeだとか、ああいうのは昔ないですよ。あんなもので生活していくなんて全く考えられなくて、私も高校生を指導するとき、馬鹿野郎そんなことを考えるんじゃないかってもっと真面目になれと言っちゃうぐらいなんです。だけど今ちゃんとYouTubeって仕事があるわけですよ。

だから、大切なことは、我々の頭の中で考えた今までの推論の中の延長でなくて、新しい全く想像もしなかった仕事が出てきて、その仕事に若者がつく時代が来るんだと。

これから我々が全く想像もしなかった仕事が出てくると、そういうところに若者がどんどん働いて行って、地域貢献なり人間形成なり社会をつくっていくというような側面もあるんだというふうに幅広くとらえてですね、せっかく大学があるので一緒にできるとありがたい

なあというふうに私はいつも思っています。

佐山主任主査：事務局から確認したいのが、特に阿部委員から意見が出ていたんですけど、仙台大学と地域コミュニティの連携だよねっていう話が出ていて、私もなるほどなっちゃって思っています。

この項目は、当初の2番と4番の項目をくっつけて作ったんですけど、仙台大学の連携という何かぼんやりした言い方をしてしまったんですが、確かにその地域コミュニティとの連携っていうことに絞るべきなのかなとちょっと思ったところがありました。

それで、今までの審議会でも、町からもご説明とか資料の提示させていただいてるんですが、大学と、例えば町、行政との連携という話であると結構やってるんですよね。それをあえて言うべきなのかっていう話で。そうではなくて、今の話とかも聞いていると、どちらかという町を介してもいいと思うんですが、もっと地域住民というか、地域コミュニティっていうか、地域の生活と大学っていうところに少し距離があるんじゃないかっていうところなのかなと話聞いていて思っていて、であるならば、そこにしっかり文言として言って、フォーカスしてあげるべきなのかなとか、そうじゃなくて、もっと広く考えた方がいいんだよっていうのか、その辺をちょっと確認をしていただいた方がいいかなと事務局では思ったんですが。いかがでしょうか。

中嶋会長：誰と連携するかという部分を、仙台大学がどこと連携するかっていうことを明記した方がいいということですかね。

佐山主任主査：そうですね。具体的には、いろいろ膨らませるっていう話もあったんですけどちょっと文言がらっと変わるかもしれないんですが、例えば今の文章だと、また仙台大学との連携を促進するためにもってだけ言ってるんですが、また仙台大学と地域コミュニティの連携を促進するためにもとか、地域コミュニティって言っちゃうとか。

阿部委員：その方がいいと思います。ここは、私たちはまちづくり条例を考えていて、地域コミュニティを活発にするためにいろいろと提言してるわけですから。

佐藤（修）委員：さっきのお話を伺っても、いろいろな資料とかでも、コミュニティ単位ですよ。

佐藤（正）委員：もう一つは、さっきも佐藤先生が言ったように、大学も言われても困るっていうような側面もあるんですよね。今すぐ仙台大学にボール投げたって、もう答申も決まっていますから、ここは少しぼやかして、或いは絞って、今後大学とか町とか住民がやる課題があるねというような形でないと、持ち帰っても今度困るしね。

だからここは少しぼやかすっていうか、一緒にやっていく一つの切り口があるねとか。

佐山主任主査：答申としては、町とか、あり方として、こういう方向性に進んでいきたいと思いますっていう言い方でいくのはいいと思うんですけど、大学側に何かを求めるとかだと、確かにちょっと少し変わってくるのかなっていう気はします。その辺の表現も検討いただければと思っています。

志子田副会長：地域コミュニティのあり方をもう少し考えましょうということを訴えておけばいいんじゃないの。

実際、大学の何人かの先生にいろいろお話聞いていると、健康に関することだったら、医

学的なところまでほぼ教えてもらえます。今現在の仙台大学は、体育学部の中も結構分かれていて、その中では、例えば食物関係から、健康面から、けが治療まで全てある程度網羅しているとのことだったので。

一番は、簡単に仙台大学と、地域コミュニティの人たちがコンタクトをとれる。それが一番なんだよね。結局今の状態だと、地域で動くという時にはやっぱり町とかに声をかけて、そこから協力要請をかけるっていう形なんですよね。

ところがそういう公の団体じゃなければ、直接ボランティアセンターに行って申し込むこともできるんだよね。そういうところを考えると、やっぱりしばたの未来株式会社あたりがそういうものの窓口になってくれれば、そこからダイレクトに、こういうお話が来たんですけど誰先生どうですかとかってね、そういうのをしてもらえるとと思う。

佐藤（正）委員：まさに中間支援の機能ですよ。だからそういうことにしといたらどうですか。それ以上といってもちょっと時間がね。

阿部委員：だから、都市構造再編事業とかこれじゃないと思うんです。仙台大学と地域コミュニティがより連携していけるような支援が必要であるということ。

佐藤（正）委員：私は逆に、今後計画されるっていうのを改行するぐらい、行を改めるぐらいにした方がいいと思う。

志子田副会長：言葉は必要だと思うよ。結局町の方針として、もうそれで動き出してるからね。だから、これに付随して、こういう協力をお願いしたいという文言にしてもらえればありがたいよね。

佐山主任主査：ちょっと補足しますと、先ほどの都市構造再編集中支援事業は、図書館とか、城址公園付近をメインに、あの辺の土地計画はもちろんなんですけど、隣接する道路であるとか、駅前、例えば駅のコミュニティプラザをどうするとか、船岡公民館が除却されますので、そちらの機能をどうするとか、そういったこともすべて複合的に考えていくような計画になっているということで、もちろんまちづくり的な機能であるとか公民館的な機能っていうのをどうするかというのは議論になるのでという話なんですよね。  
ただ、そこが何か拠点、箱物の整備って誤解されると困ると。

志子田副会長：とにかくあれは何かゾーンごとにブロックを分けてやるんだよね。住居がメインの地域とか、商工地域が中心とかっていう大まかなゾーン分けで、いろんなのを作り、やりましょうということなんでしょう。それによって、地域コミュニティの活性というか、地域の活性化を目指したいっていうことなんですよ。

佐藤（正）委員：町長はそれをコンパクトシティと言っているわけですね。

志子田副会長：だから、今回の計画のなかにこういうのも含めて欲しいっていうことを、この答申の中では言っておけばいいんじゃないの。

中嶋会長：皆さんの意見を聞いていまして、1番の後半で、仙台大学がとか何とか事業ってここだけ急に固有名詞が出てくるので、あれってなるんですけども、多分ここで言いたいの、仙台大学とかこういう事業とか、それを資源として上手く活用して、この中間支援機能がそういういろんな資源をうまく繋いでいくことで、参加と協働のまちづくりを進めるよう

な仕組みですとか、そういうのを作っていきましょうっていうことを言いたいんだよなと思って。そこを上手く表現できるといいのかなと思います。

なので、拠点という言葉がここに入っているんですけども、多分審議会で強調したいのはこの拠点ということではなくて、今皆さんがおっしゃったような組織づくりですとか、大学の資源を活用してっていうような意味なのかなと思いますが。

事務局の方でまとまりますか。

佐山主任主査：ちょっとまだニュアンスが固まっていない気がします。

中嶋会長：佐山さんが、逆に聞いておきたいこととかありますか。大分お悩みになっているようなので、ここで多分ちょっと確認したほうが。

佐山主任主査：まず、地域コミュニティ的なことは言うということは確認取れました。また、都市構造再編集中支援事業に関しても言及した方がいいっていうことなんだと認識してます。最後の締めの部分に関しては、佐藤委員からもあったように少しぼやかして、まちづくり推進機能を持つ組織等の整備についても検討されたいみたいな言い方をすればいいのかなっていう気はしています。

あとはちょっと今事務局の方で話していたのは、もちろん地域の連携っていうところできっと議論してきたので、連携となっているんですが、結局は連携が目的ではなくて、地域コミュニティの活性化が目的なんですよっていう話があって、地域コミュニティの活性化のために仙台大学の人的、知的資源を活用するために連携が必要だから、大学に近い船岡地区中心部が都市構造再編集中支援事業で見直されることに合わせて、そういったまちづくり推進、それを助ける中間支援機能の部分のまちづくり推進機能を持つところについても検討してほしいと。

佐藤（正）委員：いやだからね、コンパクトシティがあるからかどうかわからないけど、私の提案はね、今後ということを改行しちゃって、船岡地区って限定しないで、仙台大学との幅広い連携だとかそのようにしておいたらいいんじゃないですか。

船岡地区、それは今後町として考えるんでしょうけども、ここではせっかく存在している、仙台大学の支援を得ながら、この中間支援機能の強化を図りたいと。それでどうですか。

佐山主任主査：そうすると、都市構造再編集中支援事業というのは消した方がいいかなと思いますね。

佐藤（正）委員：改行して、必要であると、今後計画される投資計画集中事業などとも合わせてね。こういうふうに検討したいとしたらどうですか。

佐山主任主査：まず確認なのが、都市機構再編集中支援事業っていうのは、とりあえず今計画されてるのは船岡地区のことなんです。まず一点目。

それで、ここで言及しているのは、あくまで大学との連携を進めるっていう文脈でやっているの。もちろん文字として改行するので構わないんですけど、セクション的には同じところで言ってるような感じなのかなと。

佐藤（正）委員：だから機能と場所分けてね。地域コーディネーターの配置を検討されたいと。それには仙台大学の連携もお願いするみたいな格好にして、船岡地区というところはも

う都市構造再編集中支援事業の中に入れちゃってね、ここの上、仙台大学が船岡地区にあるから船岡地区についてというような言い方をすると、なんかやっぱりちょっと引かかるんですね。

中嶋会長：最後の方に皆さんが一致したかなっていうのは、仙台大学との連携は場所を作るのではなくて、知的、人的資源を活用して町全体の活性化につなげるということなので、船岡中心部って言っちゃうと何となく誤解を与えるので、そこはちょっと切り離れた方がいいかなと。

佐山主任主査：そうすると、やっぱり都市構造再編集中支援事業っていうのはやっぱり入れないほうがいいと思うんですよね。

中嶋会長：これはこれで別な項目として入れておくのは、こういう町が主導している大規模なまちづくりにおいても、こういう参加と協働のまちづくり推進機能もちゃんと入れてねっていうところを別で入れてほしいというようなことでしょうか。

佐藤（正）委員：だから、機能としては仙台大学がそうですよ。改行をしてね、今後計画される都市構造再編集中支援事業などにも、拠点づくりなどの何らかを含めて検討して欲しいみたいなことを書けばいいんじゃないですか。場所としてどうしても言うなら。

佐山主任主査：今日に限った議論で言えばそうなのかもしれないんですけど、ご退任された佐々木先生であるとか、今日いらっしゃらない児玉委員が言っていた意見っていうのがまさに、もちろん箱物的な意見だったからっていうのはあるんですけど、やっぱりこの船岡中心部にそういうところがないよねっていう話、だから大学との連携が進まないんだよねっていう話の意見だったのでこの文章にしているんですよ。

だから、その大意が全然違ってくるので、だったら別にもう都市構造再編集中支援事業なんていう全然今まで議論してこなかったことを入れるっていうのすらどうなのかなっていう気はちょっとしているんですが。どうでしょうか。

佐藤（正）委員：もしそうだったら、町長がこだわってるコンパクトシティの気持ちを入れるならば、今後検討される都市構造再編集中支援事業の中にですね、そういうような、その拠点づくりとか箱物の話も検討されたいというふうにやればいいんじゃないですか。

阿部委員：今日出ている意見は、船岡に限らずいろんな地域コミュニティが、仙台大学と一緒に何かやりたいねっていう話ですよ。佐々木先生とか児玉委員がおっしゃってたのは、船岡地区っていうのは、大学生が来る場所で、そこで交流できる場所っていう話だったと思うんです。

地域の事業とかへ大学生が来てくれるとかそういう話じゃなくって、大学生が来やすい場所で、住民との交流が図れるということで、船岡中心部という話だったんですね。

佐藤（正）委員：そういうこともあればありがたいよね。それでいいんじゃない。

佐山主任主査：今私が皆さんの意見聞いてて、文章化するために、頭で理解しているのは、大学と地域コミュニティが活性化のために連携するっていうことは必要なんだけれども、一直線でここが繋がらないので中間支援が必要だよっていう話だと思ってるんです。

それで、中間支援があるのはもちろんなんだけれど、これが大学に近い船岡にないと駄目だ

よねっていう話があったから、今こういう話になってると思っていたんで、船岡という話をなくして、全域っていう話をするのは、もちろん連携が全域なのはわかるんですが、何となく今までの意図が変わってくるんじゃないという話をしているんです。

佐藤（正）委員：いやだから、それね、ちょっと調子いいこと言うけど両方入れればいいんじゃないですかね。大学と地域のコミュニティってのは必要だけでも、中間支援機能というのがないよと。中間というのは仙台大学に近い船岡地区に設けながら、そういう機能を果たしていく働きをするみたいにさ。

それを気持ちとして表すような表現にすれば。そんなこと言ったって、仙台大学に近い船岡に建物があつた方がいいねとは私も思いますね。

佐山主任主査：建物ではなく、あくまで機能ですが。

佐藤（正）委員：ああ機能だね。それは確かにそうだよね。槻木に作るよりも船岡に作ったほうがいいよって、それは確かにそうだよ。だから、そういうことがわかる文章にすればいいんじゃないですか両方。船岡地区に何か作るんでしょ。この事業を利用してそういう機能も生かせるように。

阿部委員：絞つた方がよくないですか。

佐山主任主査：何かここまで言う必要ないんじゃないかっていう議論になってるのかなって今思っていて、どうなんでしょうっていう。ちょっとその辺は、会長に意見を。

中嶋会長：今、佐山さんから口で説明されるとすごくよくわかって、この文章がちょっと足りないのかなと。私も佐藤委員と一緒に意見で。仙台大学との連携においては、今後重要であるっていうのをまず言った上で、その一つのやり方としてはその事業を生かして、船岡地区中心部にそういう機能を持たせたらいいんじゃないですかという文章にすると意図が伝わるんじゃないかなと思います。

あと、今日いらっしゃっていない村山委員や児玉委員が新鮮な目でもう1回見ていただいでご意見いただくのもいいのかなと思いますが。大体事務局の方で大体書けそうであればいいんですが。

佐山主任主査：前段部はどうでしょうか。

中嶋会長：そうですね。今後半だったんですけども、地域コーディネーターのところ言及している部分、前半の部分については、こちら特に問題ありませんでしょうか。

佐藤（正）委員：企業は難しいのかな。大学の話ばかり出ているんだけど、さっきの株式会社じゃないんだけど、せつかくある程度の大きい会社もあるんだから、そん中にコーディネーターできる人もいるんだから何かそういうの使えないかね。

中嶋会長：そうですね。大学だけ挙げているんですけど、ちょっと企業の話も出ていたので、企業っていう言葉を入れなくていいのかなってのはありますね。

佐藤（正）委員：あともう一つはね、職員を前にしてずばり言うけど、これから職員が専門性をかなり上げていかないと駄目だと思う。

志子田副会長：正直なところね、今は地域の苦情というか、例えば道路の路肩の補修どうのこうのっていうのも、結局お話を聞くと技術職が少ないために、なかなかそこまで手が回らないっていうことをいろんなときに言われるんだよね。

だから、やっぱり専門性のある人を、これからは拡充していかないと、例えばまちづくりにしても、地域コミュニティ、地域づくりにしても、いえることじゃないかなっていうのは思っています。

中嶋会長：大庭委員の立場から何かご意見ありますか、このコーディネーターの部分。

大庭委員：ちなみにこの地域支援コーディネーターって、ゆる.ぶら的な中間支援のところのことなんですか。中間支援機能の充実っていうタイトルがあるので、そこにいるということの、スーパーバイザーできる人っていう形で、例えば、ゆる.ぶら的なところに、地域支援コーディネーター、スーパーバイザー的な方を置いて、その下に例えば私とか松田さんとか、あと、例えば、仙台大学も地域連携室みたいのがあるし、厚生労働省は各高齢者施設にも、地域連携室ができてきたらそういうところにも多分コーディネーター的な下部組織ができてくれば、その人たちと連携できる人というふうな発想でいいんですかね。

佐山主任主査：今までの議論の中で、要は主になる人みたいな感じですかね。中心になるとか、ハブになるようなコーディネーターが必要だよっていう話ではありました。

しかしながらですね、所管課がまちづくり政策課なので、とりあえずまちづくり推進センターっていう文言にはしているものの、先ほどの説明でも申し上げたんですが、それは社会福祉協議会が担ってもいいし、生涯学習課なり生涯学習センターが担ってもいいし、もちろんゆる.ぶらが担ってもいいのかなというように。そこは今までの審議会で結論は出てなかったのかなと。いろんなコーディネーターがいるから繋がらないといけない、多少連携はしていますけど、中心になるところがないと駄目ですよっていう話と、中嶋会長から事例紹介いただいた大崎市岩出山の事例とか、まさにこういうことを思っていたんだと審議会の皆さんは言っていたので、そういうことなのかなと。

会長の方からも語弊があれば補足していただければ一番いいんですけど、大崎市の事例も、あれは、やはり包括ケアシステム的な生活支援コーディネーター、その部分の機能を担っているんですよ地域支援コーディネーターは。

つまりは、生涯学習的なコーディネーター機能とまさに社会福祉的なちょっと介護保険とかそっち系のもも包含した、両方の分野のところでの地域支援コーディネーターっていうのがいて、まさにそこを一手に担っているような感じなので、どこが始まりであってもいいのかなぐらいの含みを持たせてるような文章にしてるつもりではあります。

中嶋会長：ご説明の通りで、岩出山の事例をご紹介したんですけども、あれは今まで行政の縦割りのもとで、福祉の分野に福祉のコーディネーターがいて、まちづくりはまちづくりのコーディネーターがいたんですけども、大崎市は上手く課で横の連携をして、国からの補助金がついたりしてそれぞれコーディネーターを雇っているのを、お金を1つにして、1人を雇って全部見てもらいましょうっていうことです。分野間の繋がりも同時に作るっていう仕組みを作って実験的にやっていたので。多分皆さんが言っていた各分野のコーディネーターをつなぐ役割っていう意味ではそういう立場の人が必要っていうことなのかなと思います。なので、生活支援コーディネーターの予算とまちづくり系の予算と合わせて、1人の人がそれを受けて、全部を見てたっていうようなやり方ですね。

大庭委員：今、福祉分野の方でいくと、結局、重層的な発想というか、障害のある方、高齢の方、それからお子様の部分と、それから生活困窮の方たちの部分って、横で繋ごうっていうふうに一元化で考えていきたいねっていうのが時代の流れなので、それと同じような発想で、町も結局、今は縦で動いているけど、大崎市のように柴田町は一発ではいけないと思うんですが、考え方としては、多分、横断的になっていく時代になっていくかとは思いますが。

中嶋会長：大崎市も役場の組織体系の目線じゃなくて、結局福祉もまちづくりも同じ1人の市民が受けるものだから、市民目線で考えればコーディネーターは1人でいいんじゃないかっていうような考え方でやっているような感じでした。

佐藤（正）委員：私が言ったスペシャリティってのはまさにそういうことで。何か1ヶ所知っていて意味じゃなくてね、ただ大学出てきたって駄目で、問題は現場でね、町を知っている人が横に繋がってね、そういう発想で働くことで鍛えられた職員になるんであって、大学で専門なったからってできるわけない。

よく町を知っている人がそういう勉強をして、努力して、道を切り開いていくしかないんですよ。そういうのをスペシャリティと私は言っているんだよね。

中嶋会長：そうすると専門的な知識や経験を有するって言葉が出てくるんですけど、これもそのままあっていいと思いますね。事務局の方ではいかがですか。今いろいろご意見出ましたけれども、文章的にはどういう方向に。

佐山主任主査：どうでしょう、文章は変えなくていいんでしょうか。

今聞いていて、特に変える必要はないのかなという気はちょっとしてはいたんですけども。どうでしょうか。

中嶋会長：文章的には、このままでもよろしいですか。それとも何かちょっと考えていただければと思いますが。

佐藤（正）委員：さっきせっかく佐山さんが言ったのが入ればね。あれ聞いてやっとわかった。

佐山主任主査：後段は変えます。「また」からの部分は、変えないといけないかなと思います。皆さんからのお話いただいたので。前半の3行ですね。これに関しては考え方としてはそういうことでいいということだったのかなと。

中嶋会長：この文章で大丈夫ですかね。少し後半の部分とうまくバランス取れるように調整していただけるとありがたいです。

また整ったら皆さんに見ていただいて、ご意見いただければと思いますのでお願いします。

では一旦、2に進みたいと思います。2の地域経営組織の立ち上げのところ、ご説明お願いします。

佐山主任主査：（資料を基に内容を説明）

中嶋会長：次期の審議会も見据えた提言ということになりますけれども、地域運営組織の立ち上げですね。前半は事実を説明していただいているのでいいと思うんですけども、後半の部

分特に、地域運営組織の立ち上げにつなげられたいということで締めていますけれども、この辺の文章とか、内容について何かご意見あれば。

大庭委員：私今、仕事で地域の居場所づくりとかをやってるんですが、結局、介護保険制度でいくと、その中学校区に包括支援があるということで、三つ中学校あるので、三つのエリアになってるんですが、ただ、居場所とか、通いの場っていうマップをつくろうと落とし込んだときに、やっぱり小学校区なんだなっていうところが、実際調査をしてみても思ったので、やっぱり地域づくり協議会の小学校区っていうのは、住民の皆さんたちの生活のエリアなんだなっていうふう感じたので、そこで連携が取れてれば、一番ベースなのかなっていうふう思ったので、一度調査をしてみる必要があるのかなって思ったところでした。

中嶋会長：さっきの小さな拠点の話も、概ね小学校区が想定されてるかなと思いますので、それが柴田町では実際どうかっていうところを調査するというのは今後の審議会の課題としても、テーマとして挙げていいんじゃないかというようなご提案でした。  
他に何かご意見ありますでしょうか。

関委員：小学校区、私なんかは10区ですけど、船迫小学校区ってのは行政区でいうと、6行政区で作っているのが船迫小学校区なんです。そこで毎年文化祭やっているんですよ。それが一番いいなと思うんですけども。10区は1,300人いるんですよ人口が。七ヶ宿町と同じ人口がいるんですよ。所帯でいうと620戸いる。何をやっても大きすぎてできないですよ。10区には11班あるわけですよ。一班30人ぐらいね。それがちょうどいいんですよ。  
今の行政区、区長制度だと大きすぎるんですよ。何をやるにも。さっき言った船迫小学校だともっと大きいわけだよ。

志子田副会長：今の話題とはちょっと違うんじゃないか。

関委員：一つの行政区でも大きいところと小さいところがあるんですよ。それを一まとめにするのは無理なんです。

阿部委員：その問題は確かにありました。ただ、今この審議会で話すことではない。  
この審議会はもうすぐ4年経つわけですよ。今はその間話し合ってきたことの総括をしてるんだから。

佐山主任主査：一つだけ補足すると、町内会単位が大きすぎていろんなことがやれないっていうのは、人数が多い町内会だと、もしかするとそういうこともありうるのかもしれないんですけども、今までの審議会で話していたのは、特に高齢化少子化にもなってきて、今まで柴田町はやはり行政区単位が基本で、町内会単位で計画を立てて、いろんな自治会運営を中心にコミュニティ活動をやってきたっていうところで、むしろそれが課題解決には小さすぎるんじゃないかっていう議論で、連携がやっぱり必要じゃないですかと。

例えば、特に防災であるとか、そういったところが一番顕著なんですけれども、そういったところにはやはり複数の地区、特に小学校区ぐらいの複数でまとまってやっていかないと、なかなかそういうことがうまくいかないですよ。

あとは、志子田副会長とかから言われたのは、イベントも、一つ一つのところでやっているとなかなか立ち行かないところがあって、そういうのを、みんなでやるとかですね、そういったことがありますよねっていう話がありましたので、もちろん行政区を大きくしろとい

うことではなく、町内会は町内会としてある中で、その上に町内会よりももっと大きな地域運営組織という、いろんなところをまとめたような組織がありますよってということです。

実際にこの辺でいうと、白石市であるとか丸森町であるとかってのはそういうのがもうすでにでき上がっています。大崎市もそうなんですけど、そういうことを柴田町でも検討しなくちゃいけないんじゃないかっていうことを言った方がいいんじゃないかということです。

中嶋会長：私もこれはすごく重要な、本当にやるかやらないかは別としても、検討していくことはすごく重要だと思いますので、この文章でよろしいのではないかと私も思います。よろしいでしょうか。

佐山主任主査：立上げにつなげられたいとまで言っちゃったんですけど、そこまで言っているんですかというところをご確認いただきたいなど。

研究が必要だろうっていうところまではもちろんなんですけど、ここまで言っているか。

中嶋会長：検討されたいくらいにしておくかどうか。

志子田副会長：立ち上げまで言うとね、担い手をどうするっていうのが出てくるから。

実際自分もそういうのに関わっていて、今回も10月1日からメタセコイアの募金活動を始めるんですけど、12月3日に点灯式やりますけど、担い手っていうのを考えたときに、この連携というのが必要だなと。実際今は槻木中学校区っていうことで、柴田小学校区の人たちも一緒にやっています。

また、一番いいのは財政支援をしてくれるっていうところ。実際のいろんな活動やってると財政っていうのが一番のネックになっているんですよ。

連携することによって、例えば一つの区では小さい金額だけど二つ合わせれば、そこその金額になるとかね、そういう財政支援っていうのを非常に喜んでいたというのはあるんです。だからこの言葉は絶対入れて欲しいなと思ってるんです。

中嶋会長：最後の文言を佐山さんも悩んでいらっしゃるということだったので、立ち上げにつなげられたいでいいかどうかだけお伺いします。

志子田副会長：立ち上げという言葉よりは次に続くかどうかわからないから検討の方がいいかなと思ってるんだよね。その言葉だけはちょっと引っかけたんだ読んでいて。

中嶋会長：私もちょっと引っかけましたけれども、いかがでしょうか。立ち上げのままでいいという方はどのくらいいらっしゃいますか。

大庭委員：調査して検討っていう形の方が。実際、例えば、柴田小学区は小さい行政区がいっぱいじゃないですか。そうすると敬老会ができないから、柴小学区でいっぺんにという形も実際にあるので、今後、関委員の行政区は大きいけれども、もしかするとAとBに分かれるかもしれないので、今までそうやって分かれてきた行政区いっぱいあるので、今後どうなるかわからないと思います。

中嶋会長：立ち上げってすごく大変だと思います。実際立ち上げまでは、行政側としてもすごく大変だと思うので、この言葉でいいかっていうのはちょっと町の事情等も汲んでいただいて入れていただければいいのかなと思います。

審議会としては検討でもいいんじゃないかというようなご意見がありましたのでご検討く

ださい。

佐山主任主査：では最後の方の文章だけちょっとニュアンス変えるかもしれません。

中嶋会長：概ね3番のところも皆様からご意見いただけたかと思しますので、佐山さん、短い時間で大変だと思いますけれども、もう一度ちょっと文章を整えていただいて、取りまとめをお願いいたします。

阿部委員：ささやかなことなんですけれども、3番の今後の課題についてという表題はふさわしいのでしょうか。

中嶋会長：これは多分例年のものを踏襲している表記だと思うんですけれども。

阿部委員：そうなんですか。なんかね、こっちも課題じゃないですか。3番で今後の課題っていうと、統括してこれが課題だよというふうに見えてしまわないかと思って。

志子田副会長：要するに、今日もらった資料の6番までは、今回の審議内容についての課題なんですよね。それで、7ページの3の今後の課題っていうのは、いろんなお話をした中で、見えてきたものがあるから今後こういうことについても目を向けて考えなきゃいけないよっていう次の審議会メンバーの人たちの宿題なんですよ。これは今までもずっとそういう形でした。

中嶋会長：課題についてっていうことで重なっているんでなんかわからなくなるということですよ。そうしたら、3番は課題についてというふうにそのままにして、4ページの方を条例、チェックシートの検証結果ぐらいにして、課題についてという言葉を使わなければわかりやすいですかね。

佐山主任主査：そうですね、前のを踏襲しているんですけれども、別に変えてもいいのかなと思います。一応前のまんまのものにそこになるべく内容を当て込んでいったみたいなイメージです。

中嶋会長：このアラビア数字の大きい123は、毎年同じ表題にしているということですよ。なので、この見出しの例えば4ページの1とかという部分をもう一回考えていただけると。

佐山主任主査：会長から提案があったように、例えばですけど4ページの算用数字の1のところを、基本条例チェックシートの検証結果としてもいいですか。課題を使わずに。

阿部委員：その方がいいと思います。

佐山主任主査：課題がたくさん出てるような感じになっちゃうので、これはあくまで検証結果っていうことでいろいろ提言をするということで1番を変えたいと思います。

中嶋会長：他に、今言っておくべきことある方いらっしゃれば、お願いします。

また後でも、ここ1週間ぐらいであれば、直接佐山さんの方に聞いていただいてもいいのかなと思いますので、よろしいでしょうか。大体2時間が経とうとしていますので、まとめに入りたいと思いますけれども、事務局の方では大丈夫でしょうか。

事務局にお返しいたします。よろしくお願いいたします。

5. その他

6. 閉会

志子田副会長からあいさつ

以上で、全ての議事を終了したので、会長は午後4時41分閉会を宣言した。  
本会議の顛末を記載し、その内容が相違ないことを証するため、次のとおり署名する。

令和 年 月 日

会議録署名委員

会議録署名委員